

大学・研究機関崩壊の序章は始まっているのか？

特集によせて

関口 順一¹・川瀬 雅也²・清水 和幸³

日本の高等教育が今崩壊の瀬戸際にあることを実感されている方は少ないであろう。極端な円高ではあるけれども、企業の収益はリーマンショック前のレベルにかなり近づいており、株価もそこそ持ち直し、中国をはじめとするアジアの景気が急速に好転し、むしろ大きく成長しているのだから、日本の財政赤字を考えなければ、まさに研究投資を積極的に押し進め、アジアのリーダーとしての存在を確たるものにする時期なのである。しかし現内閣の政策は、財政再建という錦の御旗のもとに、まったく正反対の方向に動いているように思える。「何が国家百年の計として重要であるのか」の視点が曖昧で、国民受けのする政策のみに国の財源が振り向けられているように感じる。「生物工学分野」の研究の発展を担う当学会も、政府の施策に大きく影響を受け、それゆえ個々の問題を高等教育全般の問題として提起し、解決を計らなければならないと思うに至った。そこで本特集には「我が国の科学・技術の進むべき方向と必要な政策」について日本化学会会長で学術会議第三部部長の岩澤康裕・東大名誉教授にご寄稿をいただいた。お読みいただければ、本タイトルの「崩壊の序章はすでに始まっている」と感じられる方が多いのではないだろうか。

本特集では以下の内容を取り扱っている。

1. 科学・技術による力強い日本の構築—我が国の科学・技術の進むべき方向と必要な政策— (岩澤康裕)
2. 教育・研究の質を保つ：欧米の大学では (福井希一)
3. 就職活動の長期化と向き合うための生物工学教育分野の対応策 (岡本賢治)
4. 初等・中等理科教育と生物工学教育の関わり (川瀬雅也)
5. 大学院教育の実質化と生物工学教育 (久保 幹)
6. 教育のGPと生物工学教育 (寺田 聡)
7. 他分野における生物工学教育の広がり
～山梨大学グローバルCOEプログラムからの考察～ (森 一博)

8. 生物工学分野も含む国際若手研究者育成拠点

(関口順一)

第2の観点は、主に大学院修士課程の教育・研究が、崩壊の危機にあることである。就職氷河期に近い就職難のため、修士学生は1年次の秋から就職活動を始めている。製薬企業などへの就職活動が最初に行われ、年が明ける頃から大手、中小企業の就職戦線となる。以前はそれでも5月の連休までには学生もどこかの企業に就職内定をしていることが多かったが、今では夏休みを過ぎても就職先が決まらない学生が多く、このことを考えると半年から極端な場合1年近くの間大学に出てこない、出てきても研究はそっこのけでパソコンと睨めっこの学生がいることになる。このことは大学の教育、研究の実施を著しく阻害し、不十分な教育しか受けず、研究もできない学生を世に送り出すことになる。この現状をいかに打開すべきかについて2名の教育委員会メンバーからご寄稿をいただいた。

第3の観点は生物工学教育の初等・中等教育から高等教育への流れを理解することである。大学の生物工学教育は本年5月号のJABEEを中心とした特集と重複するので、その部分は5月号の特集を参照いただくことにして、ここでは大学院教育を取り上げている。

第4の観点は、プロジェクト研究として実施されている教育GP、グローバルCOE、国際若手研究者育成拠点を取り上げ、その特徴と問題点について説明をいただいた。

全部で8つの章からなる特集であるが、きれいごとではない大学の悩みが如実に書かれている。本内容をどのようにまとめあげ、実際の施策に反映していくのかの工程表はまだ持ち合わせていない。教育委員会としては引き続き粘り強く取り組んでいく所存である。

なお、一部の章のご感想で結構ですので、是非ご意見・ご感想を関口 (jsekigu@shinshu-u.ac.jp) または事務局 (info@sbj.or.jp) までお寄せいただければ幸いです。(原稿執筆2010年7月中旬)

著者紹介 ¹信州大学 (教授) E-mail: jsekigu@shinshu-u.ac.jp
²長浜バイオ大学 (教授) E-mail: m_kawase@nagahama-i-bio.ac.jp
³九州工業大学 (教授) E-mail: shimi@bio-kyutech.ac.jp